

歴史的 建造物

—— 伊勢山・紅葉ヶ丘 ——

目次

- 伊勢山皇大神宮の歴史的建造物…………… 1
[寄稿] 紅葉ヶ丘のモダニズム建築群 …… 4
お知らせ・崇敬会会長に藤木幸二氏…………… 7



伊勢山皇大神宮拝殿(昭和2年)



県立音楽堂(昭和29年)



伊勢山皇大神宮

伊勢山皇大神宮 の歴史的建造物

文・権禰宜 小澤 朗

伊勢山皇大神宮には歴史的由緒のある社殿が幾つかある。

その筆頭になるのは、平成三〇年に竣工した御本殿である。これは、伊勢神宮のなかでも重要な建築である内宮西宝殿の部材譲与を受けて、忠実に復原したもので、七世紀末に成立したと考えられる形式が再現されている。茅葺き屋根で掘立柱をもち、木部は無塗装の

ヒノキである。私たちは、千数百年前から継承されてきた古来の建築形式を見ることができるのである。歴史的建造物が文化財指定されるときは築後五十年が目安だが、御本殿はそのような概念を超越した存在ともいえるだろう。

御本殿の工事経過等を詳細かつ学術的に記録した『伊勢山皇大神宮本殿造営事業における建築工事報告書』(以下、『報告書』という)は、日本建築史を専門とする横浜国立大学大野敏教授の監修・編集により、令和六年八月に当宮から発行された。一方、この境内には約百年の年月を経た歴史的建造物がある。『報告書』には、御本殿のことだけでなく、これら歴史的建造物のことも書かれている。以下、『報告書』から引用しつつ、そのあらましを紹介したい。

大正十二年関東大震災で全焼失した状態から、本殿以下の社殿群



復興拝殿
昭和2年竣工、設計・遠藤於菟、施工・清水組 神明造 銅板屋根に千木と鯉木を備え、木部は台湾ヒノキを用いる。長い間境内景観を代表する社殿として親しまれている。

が数年をかけて再建された。いわゆる復興社殿である。ほぼ壊滅した横浜中心部にあって、港湾を始め道路・橋・水道・市電や公共施設など市街地の復興と合わせ、伊勢山皇大神宮社殿も多く市民からの寄附金等で復興が果たされた。

震災から数年後には、本殿・拝殿・神饌所、社務所、禮典所、燈台(照四海)、太鼓楼等が竣工した。

燈台は茶商大谷嘉兵衛、太鼓楼は横浜市連合青年団の寄付により建てられた。本殿以下の施設配置



神饌所
昭和2年竣工、設計・遠藤於菟、施工・清水組 拝殿と共に歩む復興社殿の貴重な一棟である。

計画をはじめ、拝殿等の主要社殿や禮典所(結婚式場)の設計を担当したのは、日本近代建築史上重要人物であった遠藤於菟だった。莫大な費用のうち、県が一万六千円、市が二万円の補助金を出した。行政から神社等への経費支援は現代では難しい。この時代だから実現できた歴史的事実である。氏子総代・原富太郎(三溪)らの尽力により市民からの寄附金は八万七千円に及んだ。横浜をあげての支援により、本殿・拝殿など立派な社殿群

が復興した。

このうち、本殿は令和三〇年の新本殿造営にあわせて、解体され、平成二三年の東日本大震災からの復興を支援するため宮城県石巻市の鹿島御児神社の本殿として再生された。関東大震災の復興本殿が東日本大震災からの復興につながった。

「横浜に残った伊勢山皇大神宮の復興・拝殿と、石巻に移った復興本殿、この近代和風建築二棟は、新本殿とともに、将来歴史的建造物として評価され、その継承が確固たるものになることを期待したい」と『報告書』は結んでいる。

神社の歴史は、そこに信仰を寄せる人びと、当宮では横浜市民のみ



裏参道水舎
昭和2年竣工、設計・遠藤於菟、施工・清水組 旧禮典所の車寄として整備された。昭和55年現記念館整備と共に移築された。

なさんの暮らしと心の営みが反映されている。関東大震災後の生活再建を懸命に取り組みつつも、社殿の復興にも尽力した先輩市民の気持がこの拝殿等に込められてい

る。言葉で語り継ぐことと同時に、その物証である建造物を見ることが出来るのは、何よりの現実感を与えてくれる。創建一五〇年記念事業の一環としての拝殿整備計画のなかで、この復興・拝殿を残していく努力がなされている。

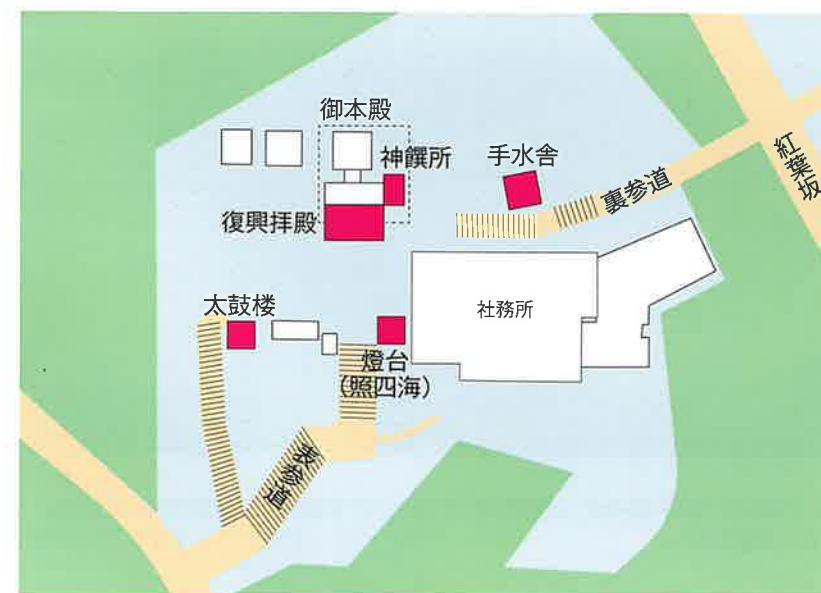
現在を生きる私たちは、過去を生きた人びとから歴史的建造物という財産を預かり、未来の人びとに引き継いでいく使命をもっているといえるのではないだろうか。



太鼓楼
昭和4年竣工、設計施工・不詳、横浜市連合青年団が奉納、当時の市長が叩き初めをした。最上階に大太鼓があり、今でも毎朝時を告げている。



燈台(照四海)
大正15年竣工、設計・秋山岩吉 施工・不詳
前身の燈台は震災で焼失し、復興時に大谷嘉兵衛の単独寄附により整備された。



紅葉ヶ丘のモダニズム建築群 人々の思いが時代を創り、 歴史的建造物の命を繋ぐ

神奈川県立音楽堂副館長 井上はるか

横浜・紅葉ヶ丘は、全国の建築ファンの隠れた名所である。日本のモダニズム建築の草分けである名建築家・前川國男の建築群が、神奈川県立図書館・音楽堂、青少年センター、神奈川県婦人会館と、時代による様式の変化を追って並ぶ全国でも珍しい場所だからだ。

中でも今年開館七〇周年を迎え、前川の初期の代表作として令和三(二〇二一)年に神奈川県的重要文化財に指定された図書館・音楽堂は、建築の専門家や学生が多く訪れるスポットだ。

港への傾斜を活かし、伊勢山と掃部山の緑をつなぐ散策路に抱かれるように建てられた図書館・音楽堂は昭和二十九(一九五四)年十一月四日に開館した。神奈川県は全国でも県立図書館開設が遅れ、戦前から設立運動があった。しかしこの付属施設として、音楽堂建設を政策決定したのは、初の公選知事で外交官出身の内山岩太郎だった。当時、「音楽」は公会堂などで演奏され、音響効果を計算した音楽専用ホールは、東京藝術大学構内の奏楽堂だけだった。つまり音楽堂は、国内初の、本格



神奈川県立図書館(現前川國男館)の夜景

③



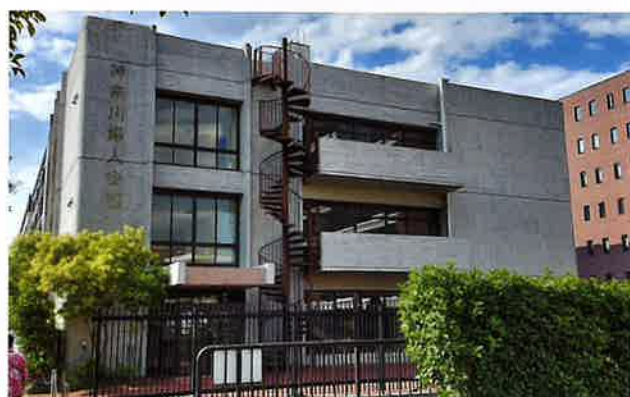
神奈川県立青少年センター

①



神奈川県立音楽堂の夜景

④



神奈川県婦人会館

②

の公立音楽ホールだったのだ。

戦後十年足らず。街なかにバラックも残る当時、音楽堂とは？と当然議会は荒れた。内山は「だからこそ、疲弊した人心に音楽で新しい社会を創る活力を」と譲らなかつた。固い信念の背後に、県内在住の重鎮音楽評論家・野村光一、声楽家の佐藤美子ら文化人たちの助言もあったと推測される。彼らは後に、ホール独自の自主事業計画など、現在の全国の音楽ホールのモデルとなった運営のプ



広々とした図書館旧本館閲覧室(現前川国男館)

⑤

レーンとなっていく。政策論の巧みな戦術で、議会は一転「可決」へと傾く。この辺りの劇的な転換は当時の神奈川新聞に連日報じられている。

モダニズム建築は二十世紀の工業社会とともに発展し、直線や原色の壁面などのシンプルな造形、鉄筋コンクリートなどの建材を特徴とする。装飾で権威を表現した「時代主義建築」と対照的に、図面さえあれば世界中どこでも同じように造れる、フラットな民主主義社会が背景にある。前川は近代建築の世界三大巨匠の一人、ル・コルビュジエに師事し、公共建築を多く手がけた。全国に広がる「前川建築」は、現在ますます

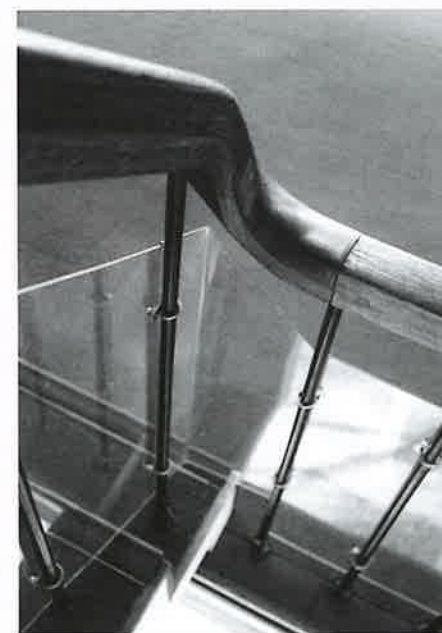


明るい音楽堂ホワイエ。柱に木目が残る

⑥

その注目度を増している。

戦後の新しい社会への人々の希求を象徴するかのようには、音楽堂ホワイエも図書館の閲覧室も、外光の溢れた、ガラス張りの明るい空間だ。音楽堂ホワイエに林立する柱をよく見ると木目がある。コンクリートの型に木枠を使った当時の工法によるものだ。一本ずつ違う木目をもつ楕円形の柱は森の木のようなものである。工業製品としてのモダニズム建築だが、ディテールを仕上げるのは人の手仕事だ。絶妙なカーブを描いた階段、現在は希少な技術といわれる「テラゾー」の床、人の掌にすっぽり収まるよう磨き上げられた手すりなど、職人たちの心意気が



職人技によって磨き上げられた音楽堂手すり

⑦

随所に感じられる。

音楽堂は開館当時「東洋一の響き」と絶賛された美しい音響の「木のホール」でも知られる。舞台天井裏に上がると、壁、天井、木材まで全てびっしりと木材で組まれているのがわかる。コンクリート建築の中に木造建築がすっぽり収まったような構造だ。音響設計は当時、東大生産技術研究所所属の石井聖光が担当した。弱冠二十九歳。前川が若い力を求めたという。「音響設計」という言葉も知られず、コンピュータなど使えない時代。実地での測定と人の耳による音響実験が繰り返された。石井の要望に前川は逐一応えたという。こうして舞台のどんな

微細な音も客席の隅々まで届くといわれ、国内外の音楽家が愛し、続々と世界的巨匠が訪れる音響が出来上がった。

巨匠だけではない。当時の職員の努力の賜物として、音楽堂には開館以来今日まで、全ての公演のプログラムが一冊ずつ保管されている。千六百種類を超えるポスター、チラシ、チケットと合わせて数万点に及ぶアーカイブは戦後日本音楽史の一端を示す貴重な資料となっているのだが、そ

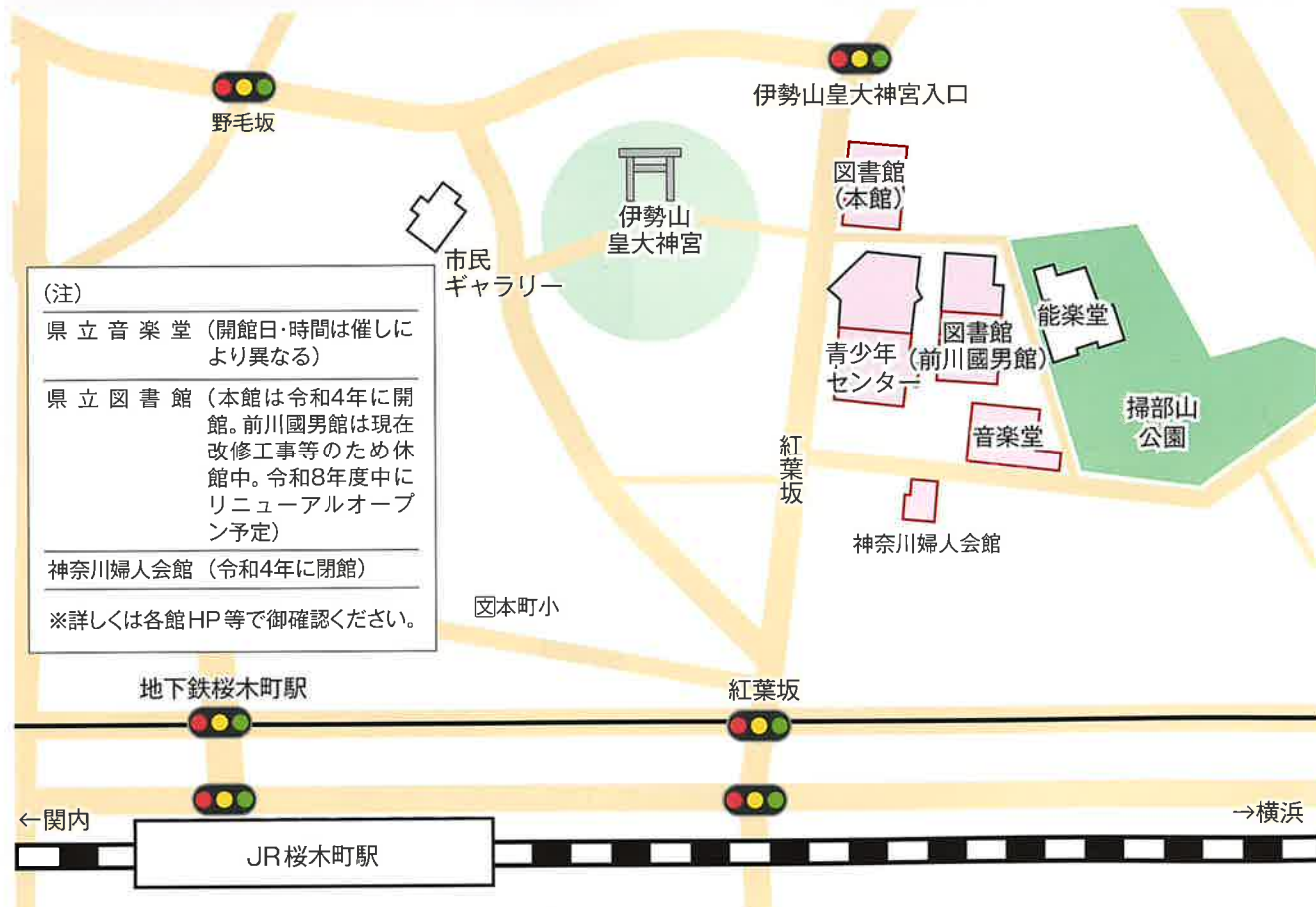


「木のホール」の名前で愛される音楽堂のホール

⑧

こには、県内のアマチュア合唱団や管弦楽団の演奏会、小中学校の発表会まで、実に多彩な県民活動の息吹が踊っている。開館直後から聴衆が押し寄せ、連日大賑わいとなった当時を知る職員はのちにそれを「渴望の時代」という言葉で語っている。文字通り音楽が「復興」と「新しい時代」の象徴となったのだ。

七十年後のいま、全国には新しいサービスを謳った「音楽ホール」がひしめき合う。坂の上の立地や小さな椅子など、「便利の時代」に音楽堂にはいささか不利な面は否めない。前川の設計した図書館(旧本館)は新しい本館や収蔵館の整備とともに「前川国男館」と名を変え、数年後のリニューアルオープンを控えて静かに眠っている。しかし今も両館の中には、人々を魅了する空気が息づいている。長年にわたる、図書館や音楽堂という「場」を「創っていく」とした人々の情熱や思いが、今も生きているようだ。建物の命は形だけのものではない。人々の思いによって繋がれていくものなのだ。



伊勢山皇大神宮崇敬会会長交代

令和六年九月十八日総会にて、神田信男会長より、藤木幸二新会長へ交代となりました。

伊勢山皇大神宮崇敬会は昭和四十年に伊勢山皇大神宮奉賛会として東久邇聡子総裁磯野庸幸会長のもと四十九名にてスタートしました。

その後、令和四年に伊勢山皇大神宮奉賛会から伊勢山皇大神宮崇敬会と名称を変更して現在では会員数五〇〇名を超える団体となっております。

是非とも崇敬会にご入会いただき、横浜総鎮守伊勢山皇大神宮の応援をよろしくお願い申し上げます。

伊勢山皇大神宮崇敬会事務局



総会でご挨拶される藤木新会長



退任のご挨拶をされる神田前会長



昭和43年久能山東照宮参拝



昭和48年伊勢神宮参拝



平成16年伊勢神宮参拝

伊勢山皇大神宮
崇敬会会員募集中
入会申込は
こちらから



ホームページ



<https://www.iseyama.jp/>



インスタグラム



<https://www.instagram.com/iseyamakotajingu.official/>



フェイスブック



<https://www.facebook.com/iseyama.official/>



伊勢山皇大神宮

『社報』第24号

令和6年11月23日発行(年2回)

発行所 伊勢山皇大神宮 総務課 電話 045-241-1122

住所 〒220-0031 神奈川県横浜市西区宮崎町64番地

発行者 阿久津裕司

印刷 山陽印刷株式会社